

行事の精選に向けて

指導部 原 野 泉

I. はじめに

本稿は、2012年10月19日・20日に開催された第54回全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会（以後全附連と表記）の生活指導分科会において発表した内容を文章化したものである。

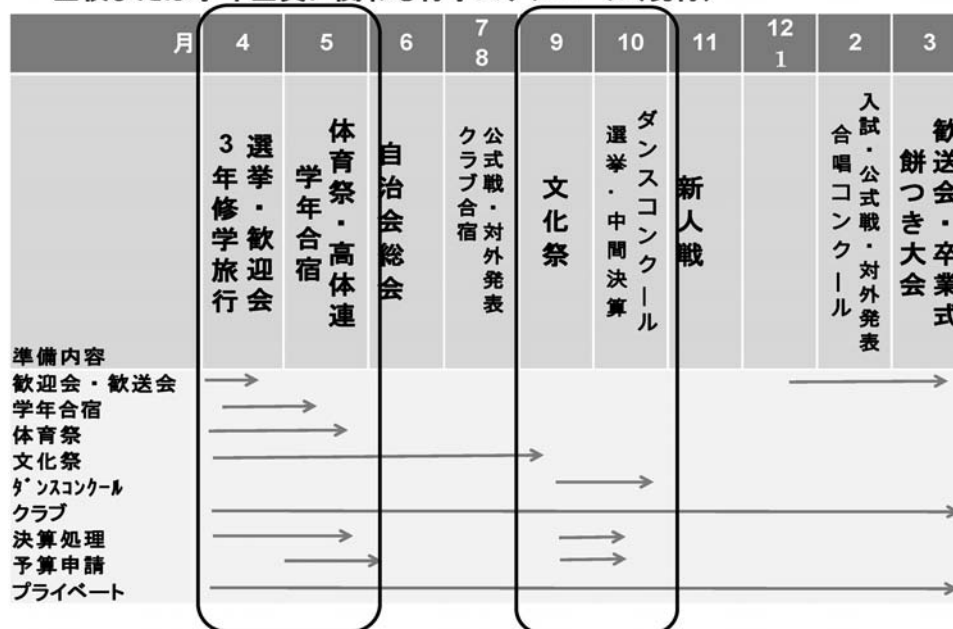
生活指導分科会は、附属のあり方分科会と並んで毎年もたれるが、そこで行われた発表に関して何らかの意見や助言が得られるため、可能な限り発表するかたちで参加してきた。2009年には、自治会財政の切迫した状況を報告することで、各校の自治会費と部費に関する徴収額について情報が寄せられ、その結果を受けて審議した結果、徴収額の規程を改めて増収を図れた恩恵がある。

今回も、特に年度初めの2ヶ月に感じられる多忙さの打開策について何らかのヒントが得られる期待もあって、以下のような発表を行った。

II. 多忙な状況

「行事が多い！」……新年度が始まって暫くの間実感することである。下図のように、新3年以外は新体制の2つの学年にとって、新メンバーで初めての行事運営の企画を進めることは大きな負担であろう。また、委員会の動きだしに止まらず、幾つもの行事の企画立案が同時に動き出すことも多忙感につながる。

全校または学年全員に関わる行事スケジュール(現行)



特に、5月下旬の体育祭に至るまでの準備期間は、体育祭そのものの係会合や競技の練習などで実動が重なる上、様々な委員会の実務をこなしながら文化祭やダンスコンクールの企画立案にも当たるため、授業に集中できない、疲労が蓄積することが心配される。

そういった状況が、学力低迷や進学実績低下につながることを懸念されている。

限られた期間であるが、一時期に多数の実務をこなさなければならない状況では、一つ一つの行事が充実しない、達成度が低い、との評価につながり、もっとじっくり時間をかけさせる必要性があるとの声が発せられる。

Ⅲ. 多忙感の要因

生徒のみならず、むしろ教員の方が多忙感に苛まれると見られるが、その要因として以下のことが考えられる。

1. 時程短縮の影響

45分授業、8分休憩で1日7時間という時程になって8年になるが、慌ただしさに馴れないまま、特に係会合に使うべき昼休みが45分のため十分な審議も報告の徹底も難しくなっている。

2. 全員参加・負担平等の精神・複数の兼務

本校の行事は全員参加が基本であるため、大規模校のような分業体制は作れない。全校行事であれば文字通り全員が係の任務と出場、出演の機会があり、そのことが多忙感を引きおこす。

3. 真面目な精神構造

本校の生徒、教員はおしなべて誠実な精神構造を有しているので、関わるべき企画も実働もテキトーとかいい加減とか妥協とかの姿勢は見られない。入れ込み具合の調節を考えられれば、多忙感や疲労感は軽減できると思われるが、手抜きせず懸命に参加することが基本精神であるため苦しさから逃れられないままである。

教員は、各々何らかの組織に顧問として関与することになるが、生徒同様、誠実に接しようとするため、本務の授業や担任業務と教育実習生の指導などと重複する状況になる。生徒以上に多忙感を覚えることになる。

4. 年度初めに複数企画が一斉スタート

行事の実施時期は分散されているが、実行委員会が組織され企画が始まる時期は4月に集中する。一人ひとりの生徒が複数の行事や委員会に関わらなければならない構図であるから、会場場所とスケジュールの調整に苦勞することになる。

5. 2年生が中核でいきなりリーダー

本校自治会の各組織の長は2年生が務める。年度が改まって、2年生に進級したとたんリーダーシップを発揮しなければならない。昨年度リーダーだった新3年生と、入学したてで状況が見えない1年生の間に立って、思うに任せない時期が続く。おそらく創立以来の方針と思われるが、どの2年生も同様の苦勞を経て成長するものであ

ろう。

6. 1・2年生のクラスは新メンバー

本校は伝統的に2年生に進級する時にクラス編成が行われる。4月に前年度と同じメンバー構成で学校生活を営めるのは3年生のみである。各委員会の選出母体はクラススペースであるから、前年度の内に実行委員のメンバーを固定しておくことはできない。どうしても、4月スタートという状態を強いられる構図である。

毎年大変な思いをしながら全行事をこなしているが、メリットもある。生徒同士は勿論、生徒と教員の深い交流も実現する。また、一人ひとりの個性が発揮され、相互に長所を認め合い、知っている人の異なる考えを知ることから新たな発想も得られたりする。

個々の責任が重く、係長や会計などを務めることから、リードしたりリードされたりといった経験が真のリーダーシップを育てることになる。そして、主体性をもった人間に成長することが期待できる。

多忙で多くのことを並行処理しなければならない状況は、ペース配分と効率化を工夫することにつながり、一点集中・ゆっくりじっくりとは異なった資質が育つ面白さがある。

IV. 解決策

毎年の苦境を乗り越えながら解決策を考えるが、妙案が出ない。そこで机上の空論的に次の可能性について考えてみた。

1. 行事を見直す・減らす

過密スケジュールを解消するために、行事を見直す提案は出されることがあるが、現在は検討しても整理できる行事はない。かつて1学期中間テストは廃止し、3学期制のまま若干の余裕は作れた。また12月頃に実施してきたホームルーム代表委員会主催の球技大会は、生徒自身の検討によって消滅した。

教員の行事検討委員会では、新たな行事を加えることを検討または提案することはあるが、廃止案を検討することは稀である。

2. 体育祭のあり方を変える

前述のように5月の体育祭を新2年生が切り盛りするのは大変であるから、体制を改めて3年生の運営にする構想は考えられる。しかし、3年生に進級して直ぐ行われる修学旅行が妨げになる。代休も含めて1週間留守になるため、企画が滞ってしまうことが目に見えている。そして、体制を改めるためには、最初の学年が2年続けて運営することになり、その負担を覚悟で新体制に乗り換える学年が出ることは期待できない。

3. 4月・5月の多忙感を受け入れる

年度末を控えて一年を総括する時期に、年度当初の慌ただしさを解消する策について検討課題としてあげられるが、解決できない状況が続く見通しである。そして、9

月の文化祭が終わって一段落すると、意外に落ち着いた時期がやってくる。一年中慌ただしさに翻弄されているわけではないことに気づかされる。

そうであれば、一時の慌ただしさは通過すべきものとして容認することも一策であろう。振り返ってみると、2012年度の各行事は充実していたと言える。大変と見られる時期を乗り越えながら、それなりにやれるようになるものであろう。

V. 発表を終えて

全附連生活指導分科会での発表内容を検討していた時期は、正に慌ただしさの真っ最中であった。しかし、全附連開催時期の秋には、あれだけの慌ただしさが過去のものとして感じられた。発表内容を検討し自問自答を続けるうちに、最善ではないにしてもとりあえずの解決策（一時期多忙の容認案）に辿り着いた感がある。

発表後、他校の先生方から助言をいただいたが、本校より少ない教員数でも、もっと多くの行事をこなしている学校があることを知り、有意義な機会であった。多くの附属仲間は小規模校と言える状況である。似たような状況でも、生徒と教員が密接に関わり合いながら、充実した学校運営を営んでいることを知ることができ、勇気をいただいた気がする。